

# 第44回全国豊かな海づくり大会 ～美し国みえ大会～

## 令和7年11月9日(日)、三重県において 「受け継ごう 命あふれる 清い海」をテーマに開催

### 1 開催の意義

全国豊かな海づくり大会は、水産資源の保護・管理と海や湖沼・河川の環境保全の大切さを広く発信するとともに、水産業の振興と発展を図ることを目的に昭和56年の第1回開催以来、全国で開催されている国民的行事です。第44回目となる全国豊かな海づくり大会は、令和7年11月9日(日)に天皇皇后両陛下御臨席のもと三重県の志摩市および南伊勢町において～美し国みえ大会～として開催しました。

日本のほぼ中央の太平洋側に位置する三重県は、多様な自然環境を有するとともに温暖な気候も相まって古来から海・山の幸に恵まれ、日本書紀において、美し国(うましくに)と称されています。

本県は、静穏で遠浅の砂浜が広がる伊勢湾地域、陸水と外洋水が混じりあう伊勢湾口およびリアス海岸を有する鳥羽・志摩地域、黒潮の影響を強く受ける熊野灘地域と、特性の異なる海域を有し、様々な漁業が営まれています。

伊勢湾地域では、採貝、底びき網、船びき網などの漁船漁業で、アサリやハマグリ、カレイやエビ類、イワシ類、サワラ等が漁獲されるほか、養殖業では、黒ノリや青ノリ、ワカメが養殖されています。

鳥羽・志摩地域では、一本釣りやはえ縄、刺し網などの漁船漁業で、カツオやトラフグ、イセエビ等が漁獲されるほか、伝統的な海女漁業が営まれ、アワビやサザエ等が漁獲されています。また、英虞湾をはじめとする周辺の内湾では、本県が技術発祥の地である真珠をはじめカキや青ノリ等の養殖が盛んに行われています。

熊野灘地域では、まき網、定置網、棒受網などの漁船漁業によりサバ類などの多獲性浮魚類やブ

リ等が漁獲され、静穏な浦々の湾内では、マダイやマハタ等の魚類や青ノリの養殖が営まれています。

このように本県では、多種多様な水産物が漁獲・生産されており、これらの水産物は、県内だけではなく広く全国に出荷されています。また、水産加工業を含む三重県の水産業は、水産物の安定供給はもとより、観光業等の幅広い産業と密接に連携した地域経済の発展、漁村文化や漁村コミュニティの形成等にも大きく貢献しています。

本県では、昭和59年10月に志摩郡浜島町(現:志摩市浜島町)において、「第4回全国豊かな海づくり大会」を開催しました。当時の皇太子同妃両殿下をお迎えして開催したこの大会を契機に、県内では、漁業関係者が一丸となって栽培漁業の推進・定着、種苗生産・放流技術の向上、種苗生産施設の整備などに取り組んできました。また、稚魚育成のための漁場整備や漁業者による資源管理の実践など、豊かな海づくりに向けた取組も推進してきました。しかし、近年は、伊勢湾における水質規制等により水質改善がみられる一方、窒素やリン等の栄養塩類の不足による黒ノリ養殖の色落ちが問題となっています。また、志摩半島以南の熊野灘では、気候変動や観測史上最長となった黒潮大蛇行に伴う海水温上昇による藻場の減少が進んでおり、アワビやイセエビ、その他魚介類の漁獲に影響を及ぼす等、漁場生産力が低下しています。

これらの環境変化により低下した漁場生産力を回復させ、豊かな海を再生するため、本県では、令和7年3月に改訂された「三重県水産業及び漁村の振興に関する基本計画」に基づき、気候変動に対応した新たな養殖品種の開発や養殖技術の普及、伊勢湾における栄養塩類不足の改善に向けた取組を開始しています。また、漁業関係者による

森づくり、海女等が主体となった藻場再生やアワビ資源増殖など、漁業者が主体となった取組を推進するとともに、科学的知見を踏まえた新たな資源管理や効果的な栽培漁業、藻場・干潟造成にも取り組んでいます。

こうした取組等が行われている中、「第44回全国豊かな海づくり大会」を再び三重県で開催できたことは、豊かな海の再生に取り組む本県の姿を全国に発信するとともに、水産資源を守り育てる取組をさらに推進する絶好の機会となりました。また、大会や関連イベントを通じて、本県の豊かな海や河川といった自然環境の保全に対する県民の意識向上を図るとともに多彩な県産農林水産物の魅力や歴史・文化を全国に発信することができました。

#### <大会基本理念>

三重県の多彩な農林水産物や自然、歴史、文化等、三重県が有する魅力を全国に広く発信することで、地域の活性化を図るとともに、大会開催を通じ、水産資源の保護・管理、海や河川などの水域環境保全、自然環境を守っていくことの重要性を県内外へ広く周知し、水産業の持続的な発展と豊かな海や河川が次世代へ引き継がれていくことを目指します。

#### <大会基本方針>

- ① 持続的な水産業の次世代への継承
- ② 豊かな海や河川の恵みを楽しむための水域環境の保全
- ③ 多彩な魅力あふれる「美し国みえ」の発信

## 2 ～美し国みえ大会～の概要

#### <主な行事の日程等>

##### ○式典行事

日時 令和7年11月9日(日)午前  
会場 志摩市阿児アリーナ(志摩市)



大会公式ポスター



大会応援マスコット「とこまる」

##### ○海上歓迎・放流行事

日時 令和7年11月9日(日)午後  
会場 宿田曾漁港(南伊勢町)

##### ○絵画・習字優秀作品御覧、漁業関係者・功績団体表彰受賞者等との御懇談

日時 令和7年11月8日(土)午後  
会場 志摩観光ホテル(志摩市)

##### ○関連行事

日時 令和7年11月9日(日)

##### 行事名および会場

- 第23回赤須賀漁業まつり：桑名港(桑名市)
- 第20回白塚おさかな祭り：白塚漁港(津市)
- 豊かな海づくりフェスタ2025 in 志摩市ともやま公園：志摩市ともやま公園(志摩市)
- ゆた海フェスタ in 南伊勢町奈屋浦漁港：奈屋浦漁港(南伊勢町)
- 第12回おわせ魚まつり：尾鷲魚市場(尾鷲市)

## 3 式典行事

天皇皇后両陛下の御臨席を賜り、全国各地から招待者など790名が参加し、式典行事を行いました。

### (1) プロローグ

#### 第1章 【美し国の海の豊かさと伝統】

志摩市立東海中学校郷土芸能クラブ、安乗人形芝居保存会が、地域の伝統芸能であり国の重要無形民俗文化財に指定されている「安乗の人形芝居」で豊かな海への感謝と願いを込めた「戎舞」を演じた後、「美し国」の成り立ちや、豊かな自然・多様な交流を拠り所に発展してきた三重県の歴史を映像で紹介しました。

#### 第2章 【地域の特徴を活かした水産業】

本大会のナビゲーターである浅尾美和さん、瀬古利彦さんが登場し、三重県を代表する魚種であるイセエビの資源管理や養殖業における水産物のブランド化の取組を映像で紹介しました。

#### 第3章 【豊かな海の未来をともにつくる】



プロローグの様子

都市と漁村をつなぎ、新たな担い手の確保に取り組み漁業者の活動や子ども達との交流に取り組む漁業者の活動や想いが映像で紹介された後、四日市諏訪太鼓保存会により大漁を祈願した力強く勇壮な「鈴鹿来神」が披露されました。

## (2) 式典

私立皇學館高等学校吹奏学部の演奏のもと、天皇皇后両陛下が御臨席されました。式典の開会に先立ち、私立しまの杜こども園および私立しまの杜保育園の園児によるちびっこ海女のダンスに続き、県立水産高等学校の旗手団が入場し、一見勝之三重県知事に大会旗が手渡されました。

続いて、濱口慶太三重県漁業協同組合連合会代表理事長の開会のことばで式典の幕が開き、額賀福志郎全国豊かな海づくり大会会長（衆議院議長）及び一見三重県知事から主催者あいさつ、橋爪政吉志摩市長から歓迎のことばが述べられました。



大会旗入場

その後、天皇陛下からは、「全国各地において日頃から豊かな海づくりに取り組んでいる皆さんの活動が、今後とも多くの人々によって支えられ、更に発展していくことを希望します。「受け継ごう 命あふれる 清い海」をテーマに行われるこの大会を契機として、海や漁業への人々の理解と関心が更に深まり、豊かな海づくりの輪がここ三



天皇陛下のおことば

重県から全国へ、そして未来に向けて大きく広がっていくことを願い、私の挨拶といたします。」とおことばを頂きました（全文は別掲）。

おことばの後、功績団体表彰受賞者および作品コンクール受賞者代表の表彰が行われ、作文コンクールで大会会長賞を受賞した川原瑠心さん（鳥羽市立答志中学校3年）が作文「海苔で伝える海の危機」を発表しました（全文は別掲）。海と生きることの喜びと厳しさを海苔の生産に携わる一人として描いた内容は、参加者の心に響く素晴らしい内容でした。

大会後、川原さんは、鈴木憲和農林水産大臣はじめたくさんの方からメッセージをいただいたとこのことで、反響の大きさに驚くとともに、「このような発表の機会をいただいて大変光栄に思っています。」とのことでした。



最優秀作文の発表

続いて、天皇皇后両陛下から漁業関係者へ、県立志摩高等学校の生徒の介添えにより、マハタ、黒ノリ・青ノリ、アコヤガイ、アマゴの稚魚等をお手渡しいただきました。お手渡し容器は、「海女の磯眼鏡」と「ビン玉」をイメージした2種類とし、本県の伝統工芸品である、「伊勢型紙」、「尾鷲わっぱ」、「松阪木綿」と「四日市萬古焼」、「伊賀くみひも」、「伊勢の根付」をそれぞれに用いて作成しました。

海づくりメッセージでは、県内の漁業者と環境保全活動者4組5名が登壇し、それぞれ、①地域の漁業者の受け皿として、漁業・漁村を活性化す



お手渡し容器



稚魚等のお手渡し

る決意、②地域一丸となって海の幸を守り育て次世代に引き継いでいく想い、③多様な人々との連携を通じて子ども達に海に興味を持ってもらうことの大切さ、④漁獲物の付加価値向上や魚食普及を通じた持続可能な漁業の大切さ、を発信しました。その後、ナビゲーターの浅尾さんと瀬古さんが三重県の豊かで持続可能な海づくりへの決意を唱和し、その想いを会場全体で共有しました。

続いて、坂本雅信豊かな海づくり大会推進委員会会長（全国漁業協同組合連合会代表理事会長）による大会決議（全文は別掲）が満場の拍手で採択された後、大会旗が一見三重県知事から大阪府の吉村洋文知事に引き継がれ、服部富男三重県議会議長の閉会のことばで式典の幕を閉じました。



海づくりメッセージ

### (3) エピローグ

式典終了後、野呂幸利三重県副知事による功績団体表彰受賞者および作品コンクール受賞者への表彰状の授与と挨拶が行われました。

エンディングでは、伊勢市立五十鈴中学校合唱部による合唱をはじめ、私立高田高等学校演劇部による演劇や私立三重高等学校ダンス部による創作ダンスが披露され、豊かな海づくりに向けたエールが送られました。



エピローグの様子

## 4 海上歓迎・放流行事

式典行事に引き続き、南伊勢町宿田曾漁港において、天皇皇后両陛下の御臨席を賜り、県内外の招待者 334 名が参加し、海上歓迎・放流行事を執り行いました。

### (1) 海上歓迎行事

雨の降るあいにくの天気の中、県立神戸高等学校の吹奏楽部による演奏で海上歓迎・放流行事が開会しました。三重外湾漁業協同組合のくまの灘地区および志摩地区に所属する 47 隻の漁船が大漁旗を掲げて漁船披露を行う中、地元「なぶら太鼓」による勇壮な太鼓演奏のもと、海上保安部の巡視艇を先導に、本県を代表する漁業種類の漁船 15 隻と県漁業調査船の紹介パレードを行い、招待者の皆さまを歓迎しました。



海上歓迎行事



漁船等の紹介パレード

## (2) 放流行事

放流行事は、県立南伊勢高等学校、南伊勢町立南勢中学校、南島中学校の生徒の介添えにより、天皇皇后両陛下がイセエビの稚エビとマダイの稚魚を御放流されました。放流合図は、南伊勢町立南勢小学校、南島西小学校および南島東小学校の児童が、海づくりのメッセージを添えて行いました。



御放流



地元の小学生による放流合図

## 5 会場内でのおもてなし

式典行事、海上歓迎・放流行事それぞれの招待者の皆さまには、昼食として、「高校生レストラン」のモデルとなった県立相可高等学校調理クラブが監修した、県内の特産品をふんだんに盛り込んだ大会記念弁当「美し国みえのめぐみ弁当」をご賞味いただきました。また、両行事会場のおもてなしコーナーでは、県内の企業が生産する羊羹やスナック菓子、アイゴの干物や海ぶどうの提供や伊



大会記念弁当「美し国みえのめぐみ弁当」

勢茶の試飲の他、県や開催市町のPRなどで、招待者の皆さまをおもてなしました。

## 6 絵画・習字優秀作品御覧、漁業関係者・功績団体表彰受賞者等との御懇談

11月8日（土）、大会行事の一環として実施した、作品コンクール（絵画・習字）の優秀作品（三重県知事賞受賞作品）を天皇皇后両陛下に御覧いただき、受賞者の児童・生徒一人一人にお声をかけていただきました。

作品コンクール全体の応募総数は3,878点となり、県内の多くの児童・生徒がこのコンクールに参加しました。

その後、両陛下は、稚魚等のお受け者や海づくりメッセージ発表者の県内漁業関係者、功績団体表彰受賞者と御懇談されました。参加者からは、「天皇皇后両陛下は優しい方で、常に目を合わせて聞いてくれて話しやすかった」、「とても優しく声をかけてくださり、私の冗談にも笑ってくださって嬉しかった」などの感想があり、終始和やかな御懇談となりました。



作品御覧



漁業関係者との御懇談

## 7 関連行事

11月9日（日）の大会当日に県内市町や漁業協同組合により、桑名港（桑名市）、白塚漁港（津市）、志摩市ともやま公園（志摩市）、奈屋浦漁港（南伊勢町）および尾鷲魚市場（尾鷲市）において大会に関する企画展示、ステージイベント、体験や飲食を通じて水産業の魅力を感じてもらいイベントが開催されました。各会場には、大型モニターを設置し、式典行事等の映像配信を行うとともに、放流が可能な会場においては、大会を記念



関連行事の様子

してマダイ稚魚等放流が実施されました。また、桑名港では赤須賀漁協によるハマグリやシジミの即売会、白塚漁港では地元の水揚げされたイワシの握りずしの振る舞い、ともやま公園ではさかなクンやよしお兄さんによるステージイベント、奈屋浦漁港ではココリコ田中さんと鳥羽水族館館長によるトークショー、尾鷲魚市場では地元定置網の漁獲物のタッチプールやミニ水族館による展示などが行われました。これら5つの会場には計13,200人の来場があり、多くの方に豊かな海の恵みやその素晴らしさを堪能していただきました。

## 8 おわりに

本大会の開催にあたり、多くの団体や関係者の皆さまにご支援、ご協力をいただきました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

## 天皇陛下のおことば

第44回全国豊かな海づくり大会が、昭和59年の第4回大会以来40年余りの時を経て再びここ三重県で開催され、皆さんと共に出席できることをうれしく思います。

四方を海に囲まれた我が国は、古くから豊かな海の恵みを受けてきました。また、山や森から河川や湖を経て海へ至る自然環境と、そこに育まれる生命や文化は、私たちに様々な恩恵をもたらしてくれます。この豊かな海の環境を保全するとともに、水産資源を適切に保護・管理し、次の世代に引き継いでいくことは、私たちに課せられた大切な使命です。

今大会の開催地三重県は、穏やかな遠浅の砂浜が広がる伊勢湾、リアス海岸の志摩半島、黒潮の影響を強く受ける熊野灘、さらには宮川を始めとする大小の河川など、豊かな漁場に恵まれています。そのような中で、漁船漁業のほか、伝統的な海女漁業や真珠養殖業など、古くから地域の特性をいかして多種多様な水産業が営まれてきました。私が幼少期に三重県を訪れた際に見た海女の作業の様子や、真珠の加工工程、そして緑に囲まれた青い海を船が行き交う風景は、自然豊かな海で営まれる漁業や、海と共に暮らす人々の日常を感じさせるものでした。

現在、三重県においては、豊かな海を次の世代に引き継いでいくことができるよう、漁業者と共に進めるイセエビやハマグリなどの資源管理、高水温に対応した真珠や魚類などの養殖技術の研究や、新たな栽培漁業対象種の技術開発に取り組んでいると聞いています。また、伊勢湾の豊かさを取り戻すための栄養塩類不足への対応や、藻場・干潟の造成など、海の環境を保全する取組も進められていると聞きます。

近年、気候変動の影響など、多くの課題に直面している漁業関係者の皆さんには御苦労も多いことと思いますが、本日表彰を受けられる方々を始め、全国各地において日頃から豊かな海づくりに取り組んでいる皆さんの活動が、今後とも多くの人々によって支えられ、更に発展していくことを希望します。

「受け継ごう 命あふれる 清い海」をテーマに行われるこの大会を契機として、海や漁業への人々の理解と関心が更に深まり、豊かな海づくりの輪がここ三重県から全国へ、そして未来に向けて大きく広がっていくことを願い、私の挨拶といたします。

## 大会決議

豊かな海に囲まれた日本は、津々浦々で多種多様な漁撈や漁村文化が生まれ、固有の風土と歴史に根差した彩りある魚食文化を培ってきた。

ここ三重県は、北は伊勢湾から鳥羽・志摩、そして南は熊野灘まで約一千キロメートルにも及ぶ変化に富んだ海域を有し、海域の環境や特性を活かして伝統的な海女漁業やマダイ養殖業をはじめとする様々な漁業・養殖業が営まれ、四季折々の海の幸をもたらすとともに、地域産業の発展に重要な役割を担ってきた。

私たち水産関係者は、近年の急激な海洋環境の変化に柔軟に対応しながら、豊かな海を守り

育て、国民への安心・安全な水産食料の供給を果たしていく責務がある。

本年は、ここ三重県において、「受け継ごう命あふれる 清い海」を合言葉に、掛け替えない財産である豊饒の海を次世代に引き継いでいく決意を内外に示すとともに、水産業・漁村の持続的な発展に向けた取組をより一層力強く進めていくことを、ここに決議する。

令和7年11月9日

第44回全国豊かな海づくり大会

## 作文「海苔で伝える海の危機」



私の家は、答志島で海苔屋をしています。小学校二年生の時、私は初めて海苔の手伝いをしました。ひたすら同じことを繰り返すのは大変でしたが、海苔仕事に対して「楽しい」という気持ちが大きかったです。まだ小さかった私にとって、目線ぐらいの高さにあるかごに海苔を入れる作業は、本当にきつくて、正直、この仕事だけはやりたくなかったです。

でも、小さいながらも、父や母が着ているカッパをとともかっこよく思い、「溜心もカッパ着たい。」と母に頼んだのを覚えています。母が以前使っていたカッパの裾を短く切って、私に合うカッパを作ってくれました。ずっと憧れていたので、叶って本当に嬉しくて、中学生になるまで使い続けました。

中学生になると、私の身長は高くなり、気づけば、かごの高さは、目線より下になっていました。カッパも大人のサイズを着られるようになり、昇格した気分が誇らしかったです。ただ、私も一人前として働かなければならないので、小学生の時と比べると手伝いの量が増え、大変にはなりました。

小二から今まで仕事を手伝ってきて、冬の大変な時期を何度も迎えてきました。その中で、仕事以外で学んだことがあります。それは、私の家はたくさんの人に支えられて海苔を続けられているということです。昔から働いてくれている、その人たちとの会話はすごく楽しく、疲れていても元気がでます。話すたびにみんなが笑顔になって、あたたかい場所だなど、納屋へ行くたびに思います。私がたくたくたになっている時には、

「えらいなあ。まあ帰ってもえーないぞ。」

と、優しい笑顔と言葉を向けてくれます。だからこそ、最後まで頑張ろうと思うことができます。私が小さい時から何も変わらない日常が、今も続いています。美味しい海苔がとれているのは、この人たちの支えがあるからなんだと心の底から感じます。

何年前かに、海苔の色落ちで、海苔屋にとって苦しい時期がありました。海苔を摘んできても捨てるという作業の繰り返しでした。私もその手伝いをしましたが、あれは、最悪と言っている状態でした。まず、父が摘んできた海苔を見て目を疑いました。黒色からかけ離れた色でした。それも大量に。父と母は私とは違う感情を抱きながら、私が見ているのと同じ海苔を見ていたと思います。私の知らないたくさんの工夫と努力が消えてしまう瞬間でした。夜遅くに母が一人で泣いていたのを見て、海苔仕事はこんなにも難しく苦しいんだと初めて知りました。

今年は真っ黒な海苔で父と母の嬉しそうな顔は、今までにないくらい輝いていました。答志の海苔は美味しいと言う声をたくさんいただくことが増え、嬉しいし誇らしいです。父と母、働いてくれている方々の苦労を消費者は知らないかもしれないけれど、私は近くで見えてきました。逃げたくなる時きもあったと思いますが、いろんな状態の海苔と向き合い続けて今があります。たくさんの人に食べてもらえることは、海苔屋の娘の一人として本当に嬉しいことです。いい海苔をとるには、きれいな海ではなく、豊かな海が必要です。豊かな海にはたくさんの栄養があり、海藻や魚にとって大事な要素が入っています。でも、その豊かな海が失われつつあります。この現実を見過ごしてしまえば、もう二度と今のような美味しい海産物はとれなくなってしまうかもしれません。そんな中で、私たちにできることは、どのような海がこれからの漁業をする上で必要なのかを正しく知り、今の海の現状をたくさんの人に知ってもらうことだと思います。大好きな答志の海を守るために、私は、先の見えない自然とこれからも向き合っていきたいです。

鳥羽市立答志中学校三年 川原 瑠心